CLOSE UP

手と手をつなぐまち。

第４次小山町
総合計画から

❶

広域連携を推進

日常生活圏が広がっていき、生活様式も多様化されています。自治体運営についても広域的な対応が求められています。また、効率的な行政運営や住民サービスの向上に向けて、広域連携による取り組みも求められています。小山町は、御殿場市・小山町広域行政組合をはじめ、住民票や印鑑証明の広域窓口サービス、介護保険の要介護認定事務などについて、周辺市町との連携を進めています。さらに、小山町、富士市、富士宮市、御殿場市、裾野市の4市1町による「富士山ネットワーク会議」や、小山町、御殿場市、裾野市による「2市1町広域連携研究会」などで、その研究を進めています。

住民アンケートによれば、広域連携、市町村合併に関心があるものの、市町村合併には消極的な傾向が見られました。広域連携にはある程度積極的であることがうかがえます。

広域的な行政課題への対応や共同処理による行政運営の効率化を図るため、さらなる自治体相互の連携を強化して拡充する必要があります。

健全な財政運営

長引く景気の低迷や社会保障関係費の増加、町税や国・県の補助金の減少などから、地方公共団体は財政基盤の安定性を失いつつあります。

小山町でも、自主財源である町税をはじめ、交付金の減少などで厳しい財政運営となっています。しかし、町は基金の取り崩しなどで、町民サービスが低下しないよう、まちづくりに取り組んでいます。

また、平成22年の台風9号の集中豪雨による甚大な被害に対する災害復旧費も大きく、財政調整基金を充てて対応しました。

今後、自主財源の確保や経費の削減、公債費の抑制などにより自主・自立した財政基盤の確立を目指します。また、事業については町民と意見交換する機会を増やして、それぞれができることを協力しあう体制づくりを推進していきます。

❶まちの将来を考える中学生未来会議
❷富士山ネットワーク会議の会場となった豊門会館の説明を受ける、近隣市の市長と小山町長
❸役場本庁の住民課窓口

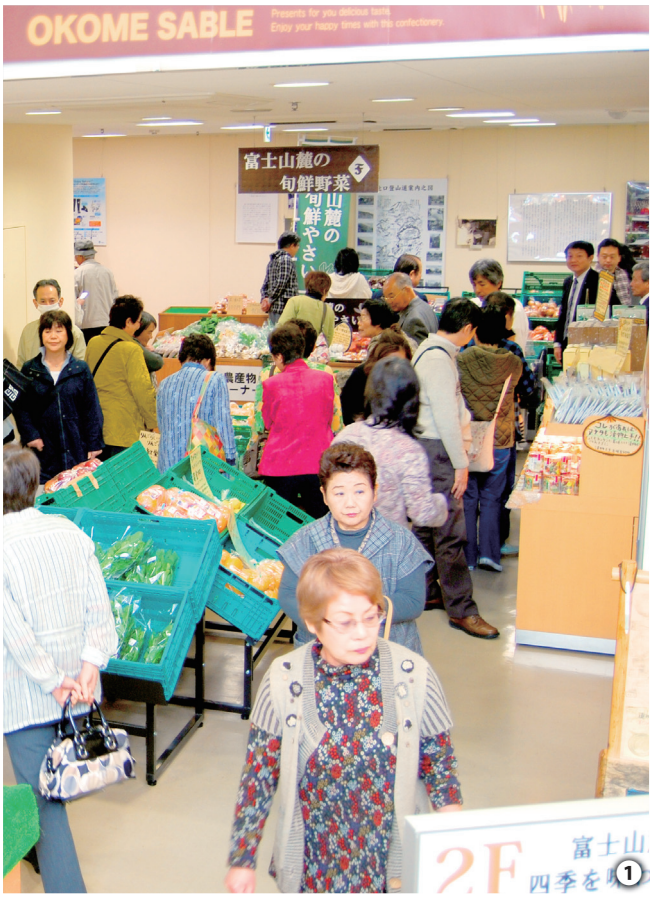
効率的な行政運営

地方分権の推進により、地方の「自己決定」「自己責任」の範囲が拡大して、真の自立が問われています。このような地方分権、地域主権型社会の進展に伴い、地方は自ら活力を高め、創意工夫による地域づくりを行っていくことが求められます。

行政への需要はますます複雑化、多様化していて、それに対応するため事務事業の整理、合理化、行政のスリム化とともに、町民に参画してもらう行政運営が課題になっています。

小山町でも業務の民間委託化や人件費の抑制など、行政運営の効率化に努めています。

しかし、今後も急速な少子高齢化などによる行政需要の増大が見込まれていて、行政改革を着実に進める必要があります。このため、事業の廃止や統合を行い、行政評価システムを導入して、絶えず事務事業の効率化・改善をしていきます。町民理解のもとに町民本位の行政運営を進めます。



❶指定管理者により運営されている道の駅「すばしり」
❷災害現場で行われた出前講座（町民井戸端会議）
❸ボランティアによる富士箱根トレイルへの道標設置

協働と共創

地方自治体の「自己決定」「自己責任」による運営が問われる今、「開かれた行政」と「協働によるまちづくり」が求められています。

小山町では、町民・団体・企業と行政がともに知恵を出し合い、まちづくりを行っていくように、地域社会の一体感を醸成する活動やNPO、ボランティア団体などの支援を行っています。

また、町民と行政がともに学習したり、町民の声を広く町政に生かすために、町長や役場職員が地域に出向く出前講座、職員の地域担当制度などを平成24年1月から設けました。これらを活用することで、町民自らが地域の課題を解決して、住みよい地域づくりが進むことが期待されます。

さらに、透明性の高い行政運営に向けて積極的に情報公開を推進します。「広報おやま」やホームページなどの充実を図り、町民が情報を発信しやすい広聴の仕組みづくりにも取り組んでいきます。

BEFORE AFTER
おやま今・むかし

【 小山町役場庁舎 】

関東大震災で半壊するなど、傷みのひどい初代庁舎建て替えのため、昭和６年７月30日、敷地1,319㎡を買収、建設工事に入り、昭和７年11月13日、二代目庁舎が落成しました。

県下きっての近代的建物として登場した庁舎は以後約半世紀、昭和56年11月、建て替えのため取り壊されるまで、町のシンボルとして存在し続けました。

80年前

現　在

現在の小山町役場庁舎は三代目。二代目庁舎が解体されたあと昭和56年12月から建設に着手し、翌57年11月30日に完成しました。地上４階、地下１階建ての新庁舎は、町の新たなシンボルとなり、この年の町制70周年を彩りました。

INTERVIEW
町民インタビュー

『今までもこれからも、主役は子ども』

山橋　弘幸（ひろゆき）さん（小山２区）

わたしが子どもだった昭和40年代、小山には人があふれ、町全体に活気がありました。祭りや運動会など、とても楽しかった思い出があります。でも、いつの間にか元気のない町になってしまいました。そこで、20年ほど前に商工会青年部の仲間と「小山の夏まつりを復活させよう」という話で盛り上がり、勢いでまつりを開催。恒例となったタイヤチューブの川下り「おやまDEどんぶらこ」にもつながっています。

若者には、何ごとにも恐れず突き進む勢いがあります。今の若者にも、イベントの企画・運営により、仲間と達成感を分かち合うようなことをやってほしいと思います。

また、子どもたちが自然に触れる体験ができる場所を作りたいと思い、10年ほど前からイタヤカエデを山に植えたり、釣り場整備の夢も持っています。いつの時代も主役は子ども。100年後の小山町で、子どもたちが豊かな自然の中を、目にした木や花の名前を言いながら歩いている。そんなふうになっていたらいいなと思います。

「おやまDEどんぶらこ」と同時に開催された魚のつかみ取りも、子どもたちに大人気。川に入り、自分の手で魚を触ることが少なくなった現在の子どもたちに、「やってみなければわからないことを経験させたい」という思いで行いました。